

辻忠博先生の追悼にあたって

日本大学経済学部長 小 椰 治 宣

辻忠博先生は、平成3年3月に本学部経済学科を卒業と同時に本学部の副手に採用され、助手、専任講師、助教授（准教授）と順調に昇格されたのち、平成20年4月に教授に就任しました。その間、助手の時代（大学院後期課程に在籍）には英国リーズ大学大学院に留学し、開発学研究科で修士号を取得しています。教授昇格直後より、本学部において経済科学研究所次長、経済学科主任、学務委員会副委員長を歴任したのち、平成26年4月には学務担当の要職に就き、平成28年3月まで務めました。いわば、学務のスペシャリストというべき存在で、それだけに精神的にも身体的にも大きな負荷がかかっていたのではないかと思います。辻先生はそんな素振りを一度も見せたことはありませんでした。

辻先生は、学部の仕事に加えて、大学本部でも全学FD委員会委員並びにFD推進センター副センター長を務めていましたので、教授に就任してからの10年余りは休む暇もないという状態だったかもしれません。そうした激務に身を置いてはいても、教育と研究を決して疎かにはしていませんでした。とくにゼミ生の指導には熱心で、厳しいながらもその厳しさの背後に思いやりがあることに気付いた学生たちから本当によく慕われていました。そのことを裏付けるような手紙を、つい先日辻ゼミの最後の学生の一人から受け取りましたので、一部を紹介したいと思います。その手紙には数10人のゼミ生たちに囲まれた笑顔の辻先生の写真が添えられていました。

〈現在、私たち辻ゼミナールは3年間学んだ開発経済学を基礎に、大学生生活の集大成として、卒業論文の執筆に励んでおります。私たちが辻先生とお会いできたのは、2017年度の前期のみでしたが、開発経済学の基礎や発表への姿勢など数多くのことをご教授いただきました。辻先生が最後に配布してくださり、夏合宿で使う予定だった、夏休みの課題のレジュメを見ると未だに心に染み入るものを感じます。これ以外にも、辻先生が配布してくださった資料は全て保管してあり、私の大学生活での貴重な思い出であり、これからの人生の糧でもあります。〉

私が百万言を尽くすよりも、このゼミ生の一文が辻先生のお人柄をリアルに表現してくれているのではないのでしょうか。辻先生の突然の訃報にふれたとき、われわれ教職員の誰もが「青天の霹靂」と感じ大きな悲しみに包まれましたが、ゼミの学生も同じように、否それ以上にショックを受けたのだと改めて思い知らされました。

自分に厳しくて、何ごとにも手を抜かずに、難しい問題にも粘り強く挑んでいく——そうした姿勢を貫き続けた辻先生は、日本大学にとって無くてはならない、まさに逸材でした。大学の将来を託するに足る人物だったといえます。辻先生は、学部の枠を越えて本部や他学部の教職員の方々とも、盃を交わしながら、教育や大学の将来について熱く語り合っておりました。それだけに、平成29年8月の猛暑の最中、50歳という、まだまだこれからという時に、遠くへ旅立ってしまったことは、本当に残念でなりません。辻先生の遺してくれた貴重なものを私たちも大切に受け継いでいきたいと思ひます。

最後に、辻忠博先生のご冥福を心よりお祈り申し上げて、追悼の辞といたします。

(2019年12月23日)